

本阿弥光悦の子孫と金沢

横山方子

(石川郷土史学会々員)

1. はじめに

金沢市立玉川図書館近世史料館には歴大な数の『先祖由緒并一類附帳』が所蔵されている。これは藩士が初代の先祖から代々の先祖、そして自分に到るまでの職歴やその期間・知行高・婚姻・親族・宗派と菩提寺などを記載して藩に提出したものであり、正保四年三月に徴したのが始まりであった。最後の時期は明治初期前後であり、調べることになった本阿弥家の由緒帳は明治四年十月と十一月、金沢県庁に本阿弥多嘉雄(清義(儀))により二通出された。うち一通は彼の父之廉が書いたものである。

本阿弥家は主に刀剣の鑑定・磨砺・浄拭を家業としたが、他にも優れた才能を発揮し、とりわけ光悦は書(寛永の三筆のひとり)・画・蒔絵・彫刻・製陶に見られるように、すべての力を遺憾なく示す。

本阿弥家の家歴や芸術については研究者により、詳らかに検討され書物となっているので、ここでは由緒帳に従って加賀藩ゆかりの人々についてのみ述べたい。

2. 加賀藩と本阿弥家のかかわり

十二家あるとされる本阿弥家のうち加賀藩から知行をもらっていた本阿弥家は二軒あるが、うち一軒は光悦の父光二(清忠)に遡ることができる。

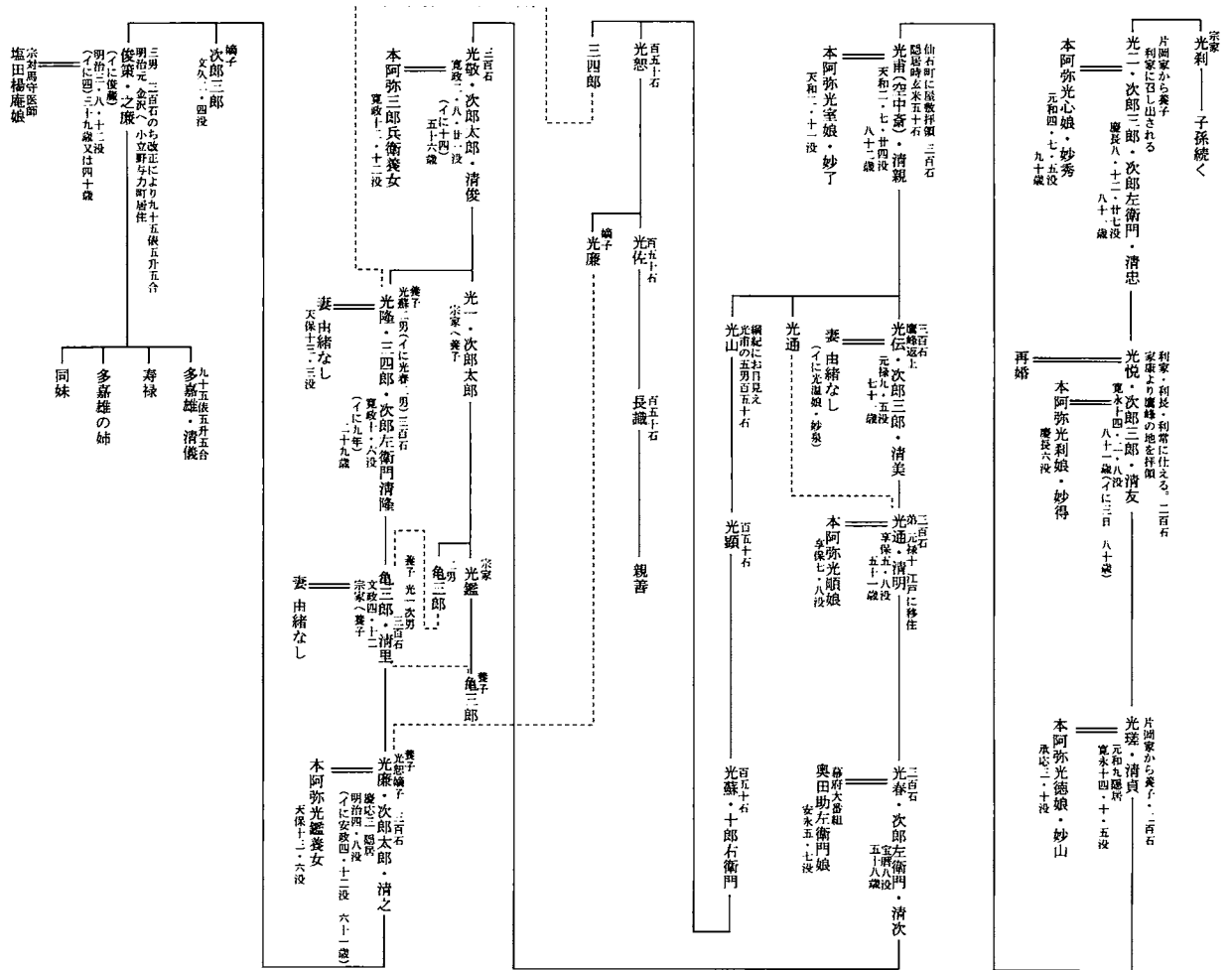
光二は前田利家が越前府中領主で利家自身がまだ微禄であった時に召し出された。特記しておかねばならないのは妻妙秀(本阿弥光心娘)についてである。光二の温厚な人柄に対し、妙秀は才気煥発でしかもそれを内に秘め、夫によく仕え、周囲の全ての人々に細やかな心を配りながら、自らは質素であったという。法華宗(近世初期から「日蓮宗」という宗名になる)の熱心な信者であった妙秀はまた子弟の教育にも、一貫した愛情深い持論を持っていた。本阿弥家に優れた人物が相ついだのは、妙秀の人となりがあってこそ、と今に伝わる。光二は慶長八年十二月二十七日没。八十一歳(由緒帳による)であった。妙秀は元和四年七月五日、九十歳で他界する。

光悦の代になると前田家との関係が更に深まってゆき、ゆかりの手紙が何通も残されている。光悦は利家を尊敬し「御憐愍のふかき君」と書き「加賀能登越中には乞食と申者一人も無之」と感想を漏らしている。二代藩主前田利長・三代藩主利常にも仕え、二百石の知行を受けていた。そして元和元年には家康より京都紙屋川に近い鷹峰の地を拝領し、それまで住んでいた地を立ち退いて理想的な芸術村構築に勤しむべく、一族と職人たちを引き連れて、移り住んだ。由緒帳には「一、拾世之祖父 本阿弥光悦 清友 右光悦儀、光二同様被召仕毎度御書等頂戴仕、光二同様御知行拝領被仰付、寛永十四年二月八拾壹歳_二病死仕候」と記されている。妻は本阿弥光利の娘であったが慶長六年に亡くなり、のち再婚した。その間「我等一年加州へ御用に罷り下り逗留」ということが『本阿弥行状記』に見え、この時は一年であったかも知れないが、度々金沢へやってきて御用を勤めたであろうことが窺える。金沢では家柄町人の中田庄三郎(屋号は紙屋・京都紙屋川の畔に住んでいたが、利家が在府中のときより親しく、前田家に願い出て金沢に居住し家柄町人となる)宅に宿泊したという。光悦は利常の懇望により、加賀の土を用いた赤楽茶碗加賀光悦を作陶する。彼はその生涯において優れた芸術品を幾つも作るが、とりわけ「舟橋蒔絵硯箱」(国宝)・「花唐草螺鈿経箱」をはじめ「不二山」(国宝)・「緋緘」・「紙屋」などの楽焼茶碗、それに能書家であったが故にその方面でも遺したものは多く、枚挙にいとまがない。前田家では光悦家のみならず本阿弥宗家との関わりも深く、たとえば利常の喜捨により元和八年、光二の義兄弟で宗家光利の孫光室に千葉中山の法華経寺に五重塔を建てさせる。利常の母寿福院が熱心な法華宗信

者であったことも、本阿弥家との縁を深くした基であったらう。

光悦の姉は尾形家に嫁ぎ、曾孫の代、光琳・乾山が生まれているし、疑問を呈するものであるが、俵屋宗達も何らかの血縁があったとする説がある。いづれにしても豊かな才能の流れる血筋であることは間違いない。

光瑳が次に本阿弥家を襲ぐが、由緒帳にはごく簡単に「右光瑳儀、光悦同様被召仕毎度御書等頂戴仕、御知行式百石拝領仕元和九年隠居奉願、嫡子光甫^右式百石無相達相統被仰付、寛永十四年病死仕候」ということと、妻は本阿弥光徳娘で、承応三年十月他界したことが述べられている。



加賀藩ゆかりの本阿弥家系図(異説はイで表記する)

その子光甫は、とりわけ利常に可愛がられる。正保三年秋、利常が費用を負担した中山法華経寺の日蓮聖人の「御真蹟」と呼ばれる真筆の曼荼羅本尊・著書・書状・図表・写経などの修理が完成するが、修理の作業分担は光甫であった。彼は仙石町に屋敷をもらったが京都から前田家の刀剣の手入れに来たときは、そこに止宿したのだろう。延宝の金沢図の中、仙石町の中程東側の邸地に本阿弥光甫の名があるということが『金沢古蹟志』巻六に載せられている。光甫は百石加増され三百石となるが、老いて隠居したときも玄米五十石を給った。光甫は空中齋という号を持ち刀剣のことは勿論、祖父光悦に似て茶香を嗜み赤楽茶碗を作り、信楽にも巧みであったという。また『本阿弥行状記』を編したことも大きな業績である。光甫は嫡男光伝や、五男の大学(のちの光山)を幼いうちから加賀へ連れてきていた。大学は五代藩主前田綱紀の目に止まり、新たに召し出され、百五十石の知行を給わるようになる。光甫は天

和二年七月に亡くなるが、本阿弥光室の娘であった妻も同年十一月死去。

光伝が知行三百石をつぎ、弟の光山系も百五十石の家として続いてゆく。光伝のとき本阿弥家は家康から賜っていた鷹峰の地を守り続けることに窮し、遂に延宝七年、幕府に返上することになった。それは光伝にとって本阿弥家の将来にかすかな蔭を感じさせるものであっただろう。彼は跡を襲ぐことになった弟光通が、まだ十一歳の時金沢へ連れてきた。綱紀にお目見えを許されたことは病弱で子供のいない光伝にとって、大切なことであり心安んじるものであったに違いない。光伝は元禄九年五月、七十一歳で永眠するが、妻に関しては「由緒無御座候」と由緒帳ではされるが『光悦』には本阿弥光温娘となっている。

光通は三百石を相続するが、由緒帳には「右光通儀拾壹歳之時、光伝金沢江召連罷越、初御目見被仰付御用相勤申候。光伝儀元禄九年病死仕、同年十二月故光伝遺知三百石無相違被仰付、享保五年八月五拾壹歳病死仕候」と記されている。兄光伝が死去した翌元禄十年光通は江戸に移住するのやむなきに至った。それまでは京都にて禁裏御用を家の誉れとしていたのに無念なことであった。妻は本阿弥光順の娘であり享保七年八月に亡くなっている。

子の光春は通称次郎左衛門と称し、江戸に住むようになってからは禁裏御用の節、父光通同様今までは逆に京へ赴くことになる。加賀藩においては正徳三年五月二十八日、御居間書院で初めて綱紀にお目見えし、享保元年にもやってきて「御道具手入被仰付、右御用相済罷歸於江戸表銀子拝領被仰付、同六年故光通遺知三百石無相違相続被仰付、其後度々金沢江罷出御用相勤、宝暦八年五拾八歳病死仕候」と、由緒帳には記されていて、金沢との縁が浅くなかったことが知られる。妻は幕府の大番士奥田助左衛門の娘であり、安永五年七月に死去。『享保侍帳』（高木喜美子翻刻）には「三百石 本阿弥次郎左衛門」と「百五拾石 本阿弥十郎右衛門」の名が並び「諸御用聞 町奉行支配」に属し、同じ支配下の職業に滑皮細工・御菓子師・火矢御用・細工・ほり物師・穴生・滑皮師・町下代・火矢御用大工・火矢御用鍛冶・惣構肝煎・金沢町年寄・鉄砲張・弓うち・矢師、それに京・大阪の商人、そして絵師であった狩野伯圓・同春悦・同即誉の名がある。加賀藩士の大野木克寛が書いた『大野木克寛日記』（千六百五十石 人持組）には本阿弥光春に刀を見てもらったことや、克寛が参勤で江戸へ行った時、本阿弥十郎右衛門・医師の佐々伯順などと散歩したことが述べられている。そればかりではなく、金沢に十郎右衛門が来た折にはたびたび大野木家にやってきて話し込んでいったことが記される。この日記では大野木家との関連のみが記載されるが他にも親しく交流を結んだ家があるかも知れない。

光敬(次郎太郎)が跡つぎとなるが寛延元年八月に初めて金沢へ来て、八代藩主重熙にお目見えし、宝暦五年には父の名代として御道具手入れを勤めるようになり、銀十枚を拝領。同九年にまた御用を勤め、同年十二月三百石を相続する。彼の子供はただひとり光一であったが、宗家の跡とりとして養子に出さなければならなくなった。そこで加賀藩から百五十石の知行をもらっていた本阿弥十郎右衛門(光蘇)の次男三四郎を養子にすることを願い出て許可される。寛政元年光敬は御用のため金沢へ来るが、見習として三四郎と一緒に連れてきた。その節三四郎は次郎左衛門と改名する。お目見えを許された次郎左衛門も、これ以後御用で金沢に来るたびに銀十枚を拝領するのが慣例になった。光敬は寛政二年八月二十一日死去する。本阿弥三郎兵衛の養女であった妻は、それから十年あまり後の寛政十二年十二月に他界した。

跡をついだ光隆は次郎左衛門と称するが、由緒帳には次のように記載され短命であったことが知られる。「寛政元年金沢江為御用次郎太郎罷越候節見習召連於金沢九月十五日初大梁院(十一代藩主治脩)様御目見被仰付、見習御用相勤候付、御染物三端拝領仕候。同六年正月廿八日故次郎太郎遺知三百石無相違相続被仰付、同年六月朔日於御居間書院継目御礼御目見被仰付、同十年六月式拾九歳病死仕候」妻は何処から嫁いだか不明となっているが、天保十三年三月病死した。

亀三郎が跡とりとなり文化三年に三百石を相続し同四年五月十五日、御居間書院にて継目の御礼の時

お目見えする。「同六年御重器并高代物手入為御用見習金沢江罷越候節五月十五日参着、御目見被仰付高代御腰物研仕候=付、為御褒美白銀五枚・晒布三疋拝領仕、罷帰候節白銀拾枚拝領仕、文政元年為御用金沢江罷越候節参着御目見被仰付、高代御腰物研仕候。為御褒美白銀五枚・御染物三端拝領仕罷帰候節白銀拾枚拝領仕、其後於江戸表御用相勤罷在候所、嫡家三郎兵衛男子無御座候=付、養子=仕度奉願候処同四年十二月願之通被仰付候」彼はこの時妻帯していなかったのだろう。妻については述べられていない。宗家を継ぐため彼は加賀藩の籍を離れた。

光廉が跡を襲ぐが、彼は百五十石光山系、光恕の嫡子である。養父亀三郎に代わって「文政五年御献上御刀研御用両度被仰付」て褒美をもらい文政七年、江戸藩邸で三百石の相続を仰せ付けられた。その後、仕事をこなしてゆくが眼の具合が悪くなり、安政四年剃髪し、慶応三年三月に隠居し明治四年まで生きる。光廉について由緒帳には次のように記載されている。

「右光廉儀、同苗故光恕嫡子=御座候所、養父亀三郎嫡家故三郎兵衛養子=相成候=付、光廉儀いとこ之続を以養子=仕度段、亀三郎より奉願候処、文政五年三月願之通被仰付、同年御献上御刀研御用両度被仰付、白銀三枚・御染物式端宛拝領仕候。同七年正月十八日養父亀三郎江被下置候御知行三百石無相違相続被仰付候段於江戸御屋敷御殿、長甲斐守殿・前田修理殿列座=被仰渡候。同月廿八日於御居間書院繼目御礼御目見被仰付、同九年御重器并高代御腰物手入為御用金沢江罷越、定式御用之外高代御腰物研被仰付、白銀五枚・晒布三疋拝領仕罷帰候節、如前々白銀拾枚拝領仕、同十二年金沢江罷越、御用相勤弘化二年於江戸高代御腰物研被仰付、白銀五枚・御染物式端拝領仕候。■上強眼霞難儀仕候=付、奉願安政四年剃髪仕、其後老衰仕候=付奉願慶応三年三月廿一日隠居被仰付罷在候」

妻は宗家本阿弥光鑑の養女で、天保十三年六月に没している。

俊策(之廉)が、このあとを襲いでゆくが、俊策自身が書いた由緒帳(最後の日付が明治二年十月)と、嫡男多嘉雄(清儀)の書いた由緒帳(明治四年十一月に出されたもの)の俊策についての内容に相違がある。また本阿弥家が京都から江戸へ移った時期について他本と異なる記載が俊策の手により述べられているが、ともかく、明治期の父子それぞれの由緒帳を全文載せたい。まず俊策が自分のことを書いた分を記すと、次のようなものである。虫喰いが数ヶ所あるため■で表す(句読点は適宜付けた)。

本國山城生國武蔵歳三十八

一、給禄高九拾五俵五升五合 本阿弥俊策菅原之廉

定紋梅鉢 居宅小立野与力町

私儀■三男=御座候所、文久二年四月光廉嫡子次郎三郎病死仕候=付■立申度段奉願、同年七月願之通被仰付、元治元年五月十五日御献上御貯御用御刀御研同苗喜三二江被仰付候間、申合相勤候様被仰付相勤、慶応元年四月十五日於御居間書院無足之節初御目見被仰付、同年十二月十七日御献上御貯御刀手入御用入念相勤候=付、白銀式枚拝領仕同二年四月廿八日御献上御刀御貯中手入御用入念相勤候=付、白銀壹枚拝領仕、同三年三月廿一日父光廉願之通隠居被仰、光廉江被下置候御知行三百石無相違私江相続被仰付、先代京都より江戸江引移候節御屋敷外居住罷在候所、明治元年三月御屋敷内御貸小屋居住奉願、其節金沢居住奉願候所同年四月廿一日願之通御間届=付、金沢表江引越、明治二年十月士族被仰付御改正=付御知行三百石俵数九拾五俵五升五合=相改、証書頂戴仕御家政向御■相勤罷在候。

また、家族などについては次の如くに記される。

- 一、妻 宗対馬守殿医師
塩田楊庵養女
- 一、嫡子 本阿弥多嘉雄

- 一、二男 私手前罷在候
本阿弥寿禄
- 一、娘 私手前=罷在候
式人
- 一、宗旨は日蓮宗、寺は小立野経王寺=御座候

ここまでは俊策が書いたもので、それに以下三行を加えて多嘉雄が県庁に提出したらしい。

右私亡父俊策由緒并家内人員如此=御座候 以上

明治四年十月

金沢県庁

本阿弥多嘉雄 印 花押

次に俊策の嫡男多嘉雄が父と家族一族などについて書いたものを写したい。

- 一、父
俊策儀、光廉嫡子=御座候処慶応三年光廉願之通隠居、家督無相違三百石相続被申付、刀剣方品■勤罷在候処明治元年金沢居住被申付、同二年知行高斜線之法を以減禄、俵数=引直九拾五俵五升五合之證書給之、同三年八月十二日病死仕候。
- 一、母 宗対馬守殿医師
塩田楊庵養女
安政二年相願嫁取仕候
- 一、弟 私手前=罷在候
本阿弥寿禄
- 一、姉 右同断
壹人
- 一、妹 右同断
壹人
- 一、おは 東京府支配士族
傍島専蔵妻
専蔵妻は俊策姉=御座候
同姓
- 一、本家 東京府在住
本阿弥悌三郎
- 一、同姓 右同断
本阿弥七郎兵衛
- 一、同 右同断
本阿弥兼次郎
- 一、同 右同断
本阿弥又四郎
- 一、同 右同断
本阿弥■二
- 一、同 右同断
本阿弥平十郎

一、同 右同断

本阿弥徳太郎

一、同 右同断

本阿弥経蔵

一、同姓 金沢居住

本阿弥喜三二

一、同 西京居住

本阿弥勝次

一、宗旨は日蓮宗、寺は第三区小立野経王寺且那御座候

右、私先祖由緒并一類附如斯御座候 此外近^{*}親類無御座候 已上

明治四年^{辛未}十一月

印

本阿弥多嘉雄^{花押}

金沢県庁

更に由緒帳の最初のページに書かれている多嘉雄本人のことも転記しよう。

本国山城東京出生

未十五歳定紋梅鉢

一、九拾五俵五升五合 本阿弥多嘉雄菅原清儀

私儀、本阿弥俊策嫡子御座候処、俊策儀 明治四年八月十二日病死仕候付、同年十一月

十五日亡父俊策為名跡被召出、遺禄無相違相続被仰付、給禄は右之通被下之段證書頂戴仕候

多嘉雄は、これを見てもわかるようにまだ若い。由緒帳を県に提出するとき、父の死亡年を明治三年と書き、また四年とも書いている。心ここにあらずとも感じられる。

一家揃って金沢に引っ越したのが明治元年である。それからまだ三年か四年しか経っていないのに、この本阿弥家では四十歳になったかならずの一家の大黒柱を失った。明治維新を迎え、多嘉雄は母や弟、姉・妹と一緒にどうやって時代をくぐり抜けたのだろうか。悲しみに加え、経済的にも大変だったに違いない。

大正五年に光悦会が出版した『光悦』には多嘉雄(清儀)について「第十三代清儀氏は即ち光悦家の当主たるべき人なるが、本阿弥琳雅氏の談によれば今や行衛不明にして、家名断絶と看做すの外なしと、真に痛恨嘆惜の至りなり。」と記されている。

光悦会では『光悦』出版にあたり、光悦の直系子孫多嘉雄一家の足あとを八方手を尽くして捜したことであろう。それにしても版籍奉還からおよそ四十五年が経っていた。金沢に埋もれてしまったのか、あるいは東京、あるいは京都へと去ったのか、今は残されたものを見ることができない。その後、何処かで元気に世を紡ぎ、御子孫が続いておられることを願うのみである。ただ『本阿弥行状記と光悦』(正木篤三 著)には『本阿弥行状記』について「次郎左衛門家に伝はったものも諸本奥書に云ふところのものが果たして原本であるか、如何かは保証の限りでなく、この家のみは、いま光法氏が家職をついでゐるが・・・」と記されており「この家」は次郎左衛門家とも思われ、そうならば光悦系の家であり、家が続けていると考えられよう。

加賀藩から百五十石の知行を受けていた光山系の本阿弥家も、維新の頃には金沢に住んでいたことが多嘉雄の由緒帳に「金沢在住本阿弥喜三二」として見える。喜三二の名は『安政四年改 加賀藩侍帳手控』(坂本修翻刻)にも見ることができた。この中には両本阿弥家が記載されていて、次の如きものである。「参百石 本阿弥次郎太郎 江戸在府」「百五十石 本阿弥喜三二 江戸在府」がそれである。両家は明治初頭に、手を取り合っけて金沢へ引っ越してきたのだろうか。喜三二の方の由緒帳が無いため詳

細はわからない。だが、この家は少なくとも明治九年には金沢に住み、痕跡を残していたことが明らかになった。

あはれとハ誰か見るへき後の世に

残す名もなきこけのしるしを

時の当主長識が作った歌である。長識は明治九年一月二十三日に、妻留意子(春山院妙路日詣大姉)を亡くす。そして菩提寺となった経王寺に自分の名「本阿弥氏菅原長識」と妻の名「室北川氏留意子」の名を並べた墓をたてた。その向かって右側面に歌が刻まれているのである。現在は経王寺御住職御夫妻が墓を守っておられる。

本阿弥の名が世の中から忘れられてゆくのではないかという淋しさと、妻を失った悲しみの滲む歌である。しかし、ただじっと沈んでしまう長識ではなかったようだ。彼は東京へ出た。

明治十七年、「石川県士族本阿弥長識」の名が世に出る。『本阿弥行状記』上巻の一部を抜萃した『空中齋草鈔』刊行のときであった。長識が出版にかかわったことが『本阿弥行状記と光悦』に記されているので、次に引用したい。

題簽には「空中齋草鈔 全 明善館」とあり、次のごとき序文がある。

空中齋草鈔

本阿弥光悦翁刀剣のよしあし見わくるの精しきと書法一派をなしたるとは誰もしりたれと其人となりの高と母妙秀の賢とは此冊子をみぬ人はえしるましくや時の明将良士の翁をことに愛まれられしも其技はかりにはあらさりしにこそ此書原二十卷あまりありしよしなれと今其ある所をしらすしかるに翁の末裔長識先生の此鈔あるは我輩の幸なれはせめて鈔をたに世に伝えまほしくこたひ先生にこひ写とり翁の家系を附録し板にゑらするになん空中齋とは光甫の屋号なり
一翁しるし

このあとに本阿弥十二家系譜を載せ、次に本文が始まるとのことだが、第一段から第十五段までと第五十一段より第五十五段の中途までであり、文は途中で切れるという。長識家に伝わった原本は完全なものではなかったが、ともかく出版されたことにより、後の研究者の参考となったのである。本文は十七丁で、奥附は次の如くだという。

明治十七年十月十日出版御届

石川県士族

鈔者 本阿弥長識

東京府下本郷区

元富士町二番地

出版者 吉川半七

同京橋区伝馬町

一丁目十二番地

喜三二と長識が同一人物なのか喜三二が長識の父なのかは、今もってわからない。だが『光悦』が出版された大正五年の系図には長識の子に親善の名があり、家が続いていたことが明らかにされているのである。

日蓮宗と縁の深い本阿弥光悦について、立正大学名誉教授中尾堯先生に話をお聞きし、また友人の戸出友子さん、経王寺の新林孝道御住職御夫妻から御教示を受けた。ここに記して感謝する。

参考資料(50音順)

光悦会 大正5年『光悦』芸艸社

坂本修 翻刻 『安政四年改 加賀藩侍帳手控』平成私家版

桜井甚一 昭和56年『金栄山妙成寺誌』妙成寺

高木喜美子 翻刻 平成10年『享保侍帳』私家版

東京国立博物館 平成15年『大日蓮展』東京国立博物館・日蓮聖人門下連合会・産経新聞社

中尾堯 平成14年『寿福山経王寺誌』経王寺

中島正之 平成6年『百万石の旅』私家版

日置謙 昭和58年『加能郷土辞彙』北国新聞社

古川脩 平成9年『加賀藩士人別帳』私家版

本阿弥俊策 同多嘉雄 明治4年『先祖由緒并一類附帳』金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵

正木篤三 昭和56年『本阿彌行状記と光悦』中央公論美術出版

森田平次 昭和9年『金沢古蹟志』金沢文化協会